九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『長生殿』訳注(六)

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/9632

出版情報：中国文学論集. 29, pp.89-103, 2000-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『長生殿』訳注（六）

竹村則行

凡例

一　『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『暈刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。

二　本訳注に当り、出典の確認や本文の解釈等に以下の諸書を随時参照したが、訳注の際にはこれを一々明示していない。

塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九二三年）
徐朔方校注『長生殿』（人民文学出版社、一九五八年）
曾永義『中国古典戯劇選注』所収『長生殿』（国家出版社、一九七四年）
蔡運長『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）

三　本訳注では、主に前記参考書に於てなお未注の故事出拠等について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行共著『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）を参照されたい。

四　**【曲牌名】**に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、**【ゴチック文字】**の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、及び唱や動作の主体を示すト書きの部分は、底本の通りに小字で示した。

五　訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六　訳文は、**【ゴチック文字】**で示した「唱」部分の訳出を含め、荘重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつ

つ、努めて平易な日本文となる様に留意した。（「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。）それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚無い御指教をお願いする次第である。

七　前稿「『長生殿』訳注」（一）～（三）」は『中国文学論集』二十六～二十八号（九州大学中国文学会、一九九七～九九年）に訳載し、また、同（四）～（五）は『文学研究』第九十七～九十八輯（九州大学文学部、二〇〇〇～〇一年）に訳載した。

八　本訳注（六）（第二十一～二十四齣）は、一九九九年一月～十二月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、担当の竹村が浄書した。この間の演習に参加した助手・院生・研究生は次の通りである。

諸田龍美・黄冬柏・野田雄史・角田美和・王展・蕭燕婉・王毓雯・垣見美樹香・河野真人・土屋聡・趙苗

第二十一齣　窺浴

【仙呂入双調過曲】【字字双】（丑が宮女に扮して登場）私は幼ない頃から容貌は天然のまま、顔には醜い隈取り。宮女の中で、私が真っ先に行って宮殿を掃除する。階段の前で、ふと小宦官に会ったので、戯れながら手を伸ばして、その袴の辺りを探ってみると、あるべき者が無い。

「私は宮女中で一番の容貌、その美しさは誰もかなわない。頬に白粉を塗りたくり、口には口紅がめちゃくちゃ。眼は銅の鈴のようであり、眉は真っ直ぐに引かれている。十本の細い指は擂（す）り粉木（こぎ）のようで、全身は漆のように真っ黒。腰回りは十抱えもある松の幹、靴は帆のない笘舟のようにぺったんこ。貴妃様はこの私の利発さを愛され、私を霓裳雨衣曲の団員に選んで下さった。ただ私は声がひどく大きく、唱う時には口の辺りがびりびり響く。身体もとてもでっかく、舞っていて御席をつき倒したこともある。天子はそれを御覧になってお怒りになり、私を梨園弟子の名簿から抹消し、即刻驪山の温泉宮の当番に転出させられた。昨日、天子様がこちらに行幸されて、楊貴妃様と共に華清宮へ逗留されるとのこと。華清温泉に一緒に入浴されるとのお達しなので、

湯殿をきれいに掃除しておかねばなるまい。」　言い終わらぬうちに、あっちから宮女が一人やって来た。

（副浄が宮女に扮して登場）

【雁児舞】あたら青春を浪費する後宮の怨女が、地だんだを踏んで胸をたたいて訴えても、誰がその苦しみを知ろう。私は一生夫もいないまま、一人寂しく空を飛ぶ雁のようになってしまうのであろうか。

（会う介）（丑）姐さん、〝空飛ぶ雁〟なんて何のことを言っているの？　今や天子様は楊貴妃様の霓裳の舞を手に入れられ、梅妃様の驚鴻の舞など見向きもされません。（副浄）ほんとだわ。私はもともと梅妃様の宮女でした。梅妃様は翠華閣から涙をのんで帰られて後、御病気になって亡くなられたので、私はここに遷されたのです。（丑）なるほど、そうでしたか。貴妃様はとても嫉妬深い方なので、私たちが再び取り立てられる望みはないわね。（副浄）やめてよ。（丑）間もなく天子様が見えます。私たちは外に出てお待ちしましょう。（退場するそぶり）（末と小生が侍従に扮して、生と旦を案内し、老旦と貼が随行して登場する）

【羽調近詞】【四季花】華清宮の別殿は奥深くてすばらしい。彫り物のある梁のあたり、真珠の簾の外に、雨や雲がうず捲いて流れている。朱色の欄干がくねって、画のような小川を経めぐり、長い廊下が何層も重なって青々とした山へと続き、赤い墻壁をめぐり回って、正門まで通じている。（末、小生）天子様、温泉殿でございます。（生）供の者は下がってよい。（末と小生が応じて退場）（生）貴妃よ、ご覧。澄んだせせらぎの温湯がくねって湯舟に注ぎ、渦や漣となっているが、この香り高い滑らかな温泉は、そなたの白い肌にこそ相応しいのだ。朕は貴妃と一緒に入浴することにしよう。（老旦と貼が、生と旦の上着を脱がせる介）（生）貴妃よ、そなたがしずしずと衣服を脱ぐと、真珠のように輝く玉体が現われ出で、私は思わず、そなたを愛し、そなたを抱き、そなたを見つめ、そなたをいとおしく思うのだ。

（生が旦を連れて共に退場）（老旦）念奴姐さん、天子様が貴妃様をこんなに愛されるなんて、ほんとにうらやましいこと。（貼）ほんとうに。（老旦）

【鳳釵花絡索】【金鳳釵】お二人は花の朝に抱き合い、月の夜にも寄り添って、(注1)情愛の美味を味わい尽くされる。

【勝如花】（貼が合唱）お二人は、日がな影が形を追うように相連なり、刀で水を切るように離れることがない。【醉扶歸】

お二人は懇ろに甘えて、互いに付き随って、心はぴったり一つ。【梧葉児】その情愛の深さは口で述べるのが難しく、鴛鴦の帷の中の睦言は筆に述べることもできず、お二人の情愛のこまやかさは尽きる時がない。（老旦）お姐さん、私たちは何年も貴妃様にお仕えしていて、美しいお顔を拝見することはあっても、まだ玉体を拝んだことはないわね。今日は試しに窓の隙間から覗いてみましょうよ。どう？（貼）いいわね。（共に奥に向って覗く介をする）【水紅花】（合唱）こっそり覗いて見れば、すらりと伸びた玉体が蓮の花のように水上に浮かび、露を帯びて艶やかに光り輝く。【浣溪紗】軽やかに腕を振って身体を洗い流し、たおやかな腰回りがさざ波にたゆたう。【望吾鄉】（老旦）朝やけに映える白い裸身が眼に沁む。【大勝楽】（貼）胸のあたり、うっすらと透き通って映える二つのつぼみ。（老旦）春を半ば包み隠したお腹のおへそ。【傍粧台】（貼）赤い腰巻の間から、ほとどころが愛くるしくちらちら見える。永新姐さん、ほら、天子様たら、【解三酊】瞳を凝らしてじっと見つめ、【八声甘州】かくも熱心に微笑みを浮かべられ、まるで呆けた様。【一封書】（合唱）私たち覗き見している宮女がうっとりするのはもちろん、貴妃様を見慣れた君王でさえも気持をおさえられなくなり、【宰羅袍】（老旦）温泉水をひっくり返さんばかりの勢いで、（貼）貴妃の玉体を洗い終るのも待ち切れずに、貴妃に近寄り、（老旦）しきりに貴妃の肩に接吻し、（貼）絶えず貴妃の腰を抱き寄せられる。【黄鶯児】（老旦）貴妃様は、無言で微笑んでうっとりと応対される。（貼）二人の気持は和らぎ、【月児高】温泉と春風とに陶然として酔っ払ったかの様。【排歌】（老旦）さざ波がたゆたい、陽光が輝く中、一対の龍が戯れながら、温泉から上る。【桂枝香】（合唱）そのさまは、あの襄王を陽台の下にむさぼった神女が、夕暮れの雨のなかで、襄王と共に帰ってゆく風情。

（丑と副浄がひそかに登場して笑う介）姐さんたち、お二人ともご機嫌ね。私たちにも見せてよ。（老旦、貼）姐さん、私たちは貴妃様の御入浴のお手伝いをしているのよ。何がご機嫌なものですか。（丑と副浄が笑う介）貴妃様にお仕えしているんじゃなく、一方で天子様を覗き見しているんでしょ。（老旦、貼）ちっ、冗談はやめてよ。天子様が貴妃様と一緒にお湯から上がられるわよ。（丑と副浄がひそかに退場）（生が旦と共に登場）

【仙呂】【二犯掉角児】【掉角児】温泉からあがると、初秋の涼気が身体を通り抜け、湯上りの貴妃を見れば、一段と光り輝いている。最も愛くるしいのは、貴妃の残り化粧や乱れた髪、更にみどりの眉毛は乾き、黒髪がつややかに

輝いている風情。（老旦と貼が生と旦に衣裳を着せる介）（旦が艶やかにぐんなりした様子で、老旦と貼が助ける介）（生）貴妃よ、そなたを見れば、風にたわむ柳、露におびえる花のようであり、ぐんなりして支え難く、嬌（なまめ）かしくて力も無く、侍女に助け起されるほど。（二人の宮女が車を推す雑色を連れて登場）天子様、貴妃様、どうか如意車にて華清宮へお帰り下さいませ。（生）車は後からついて来い。（二宮女）かしこまりました。（生が旦を連れて歩いて行く介）貴妃よ、【排歌】朕はそなたと、肩と肩を並べ、手に手を取って帰るのだ。こんな花の下で車に乗る必要はない。【東風令】頬を打つ涼風を受けて帰ることにしよう。（合唱）

【尾声】二人は既に思い思われる仲、あの無情の花や鳥でさえも、二人を見ては呆然とし、二人にならって花は蕚が並び連なって咲くし、鳥は仲良く二羽が並んで眠る。

（生）美しい花は百合香のように芳香を放ち、　杜甫
（旦）私は風に当らぬようにして、温泉からあがる。　王建
（生）侍女が助け起すと、貴妃は嬌やかにぐったりとして、力も抜けたよう、　白居易
（旦）二人共に微笑みながら、東の窓辺の白玉のベッドに寄り添う。　李白

注

（1）原文「花朝擁、月夜偎」…白居易「琵琶引」に「春江花朝秋月夜」と。
（2）【傍粧台】…九宮大成本、呉梅校本は【天下楽】とする。曾永義『長生殿研究』（台湾商務印書館、人人文庫、一九六九年）一九三頁は【傍粧台】を是とする。曾説に従う。

第二十二齣　密誓

【越調引子】【浪淘沙】（貼が織女に扮し、二人の仙女を連れて登場）雲紋のある玉梭を飛ばして、私は巧みに機絲（はた）を織る。ここ天

『長生殿』訳注（六）（竹村）

宮には元来恋愛などないが、今夜は七夕だというので、私はふと昔のことを思い出す。

【鵲橋仙】「すじ雲があやを成して浮かび、流れ星の季節となり、夜空の天の河が輝いて秋が微かにめぐって来る。一年に一度、秋風に玉露が結ぶ時期の逢瀬は、定めなき人間世界のそれにも勝るであろう。今その時を前にして、二人の心はとろけ、七夕の再会が夢のようであり、向うに見える鵲橋を指さす。二人の愛情が永遠に続くものであれば、年に一度の逢瀬であっても十分であり、朝に夕に顔を合わせる必要も無いであろう。」私は織女でございます。天帝の勅命によって、牽牛と天上の夫婦となり、毎年七夕に、銀河を渡って再会します。今日は下界の天宝十載、七月七夕です。ご覧なさい、銀河は波ひとつ無く、烏鵲（かささぎ）（注一）が橋をかけようとしています。それでは、私は織機を片付けて、お化粧を整えてお待ちしましょう。（奥で細楽を演奏し、烏鵲に扮した者が登場し、舞台を廻って飛ぶ介）（舞台の前面に一橋を架け、烏鵲が橋の両側に止まる介）（二仙女）鵲橋ができました。織女様、どうぞお渡り下さい。（貼が起ち上がって行く介）

【越調過曲】【山桃紅】【下山虎頭】私はここに、機織りの手を止めて、ひとまず香車に乗る。（合唱）**天空には雲一つ無く、初秋の暮れ方の涼風に乗って、**（橋に上る介をする）この **凹凸のある鵲橋に上れば、澄み通った川面に** 人影が逆さに映る。**【小桃紅】**更に嬉しいのは、**細く輝く七月の月とびっしり降りた露、そして低く飛び交うつがいの鵲鳥（かささぎ）。**

【下山虎尾】たちまち思う、**秋の銀河が格別に冴え返る風情を。**（橋を渡る介をする）（二仙女）織女様に申し上げます。もう銀河を渡り終えました。（貼）天の河の下に、一筋のけむりが空にたなびいているのが見えますが、あれはどこですか？（仙女）あれは唐の天子の貴妃楊玉環が、宮中で織女様に対して七夕の乞巧のお祈りをしているところです。（貼）その真心は大変なことですね。では、牽牛と一緒にそこへ行って見てみましょう。（合唱）**天上における牽牛織女の逢瀬は、毎年この時期に決っているのだが、俗界の男女の情縁が一瞬のうちに終ってしまうのは** 笑止なこと。（共に退場）（二人の侍従が提灯を持ち、生を先導して登場）

【商調過曲】【二郎神】初秋の景色はもの静か、碧（あお）く澄んだ空に淡く雲が浮かんでいる。雨に打たれて梧桐はうすら寒く、銀河はくねって流れ、すじ雲が牽牛織女星に彩りを添える。（奥で笑い声がして、生が聴き入る介）**風に乗って来る声をよく聴けば、花や木の陰から聞こえる楽しそうな笑い声だ。** 侍従よ、どこでこんなに笑っているのだ？（侍従が尋ね

る介）天子様のお尋ねです。どこでこんなに笑い声がしているのですか？（奥から）これは楊貴妃様が長生殿で七夕の乞巧祭りをなさっているのです。（侍従が回奏する介）楊貴妃様が長生殿で乞巧のお祭りをなさっているので、こんなに笑っているのです。（生）侍従どもが伝えるまでもない。朕がこっそり行ってみよう。**灯りを消し、そっと宮城の塀の方へ行ってよく見てみよう。**（退場するそぶり）（旦が、香や扇、瓶の花や化生盆を持った老旦や貼、二名の宮女を連れて登場）

【前腔】【換頭】宮殿の庭には金の香炉の煙が立ち昇り、灯明がきらめいている。米粒大の蜘蛛を小箱に閉じ込め、金盤には各種の豆の芽を発芽させ、銀の瓶には生け花がゆらめいている。（老旦、貼）長生殿でございます。乞巧の宴の準備ができました。貴妃様、御焼香下さい。（瓶の花や化生盆を卓上に置き、老旦が香盒を捧げ持ち、旦が香をつまむ介）私楊玉環は、敬い謹んで香を焚き、牽牛織女星に捧げて、両星のご加護を祈ります。どうか、**陛下に賜った金釵と鈿盒の姻縁が幾久しく続き、**（拝礼する介）**秋風が吹いて扇子が不要になりませんように。**（生が密かに登場して覗き見る介）**貴妃の麗姿を見れば、彼女が階段にぬかづいて一声ずつ祈りを捧げているのが目に入る。**（老旦と貼が生に出会う介をする）あら、天子様、いらっしゃいませ。（旦が慌てて振りむき、生に拝礼する介）（生が助け起す介）貴妃はここで何をしておるのだ？（旦）今夜は七夕でございますので、瓜や果物をお供えして、天孫の織女様にお祈りをしているのです。（生が笑う介）貴妃は天性の手芸の技巧があるのに、何を祈ることがあろう。（旦）お恥ずかしうございます。（生と旦がそれぞれ坐る介）（老旦と貼が二宮女と共にこっそり退場）（生）貴妃よ、朕が思うに、牽牛星と織女星とは銀河を隔てて一年に一度しか会えぬとは、そんな恋愛も大変なものじゃな。

【集賢賓】秋の夜空に銀河は清く澄みわたり、折しも橋を渡って来る織女の車を牽牛がお迎えするところ。奈何せん、天帝に許された逢瀬の時は早や半ばが過ぎ、耳元に明け方の鶏の声がする頃合い。雲も露も冷たく、天上の両星はこれから一年孤独の年月を過ごすことになる。（旦）陛下が両星の離別の怨みをおっしゃれば、私は寂しくなります。人間世界では天上の事が分らないのが残念です。**天上界のことを思いますに、彼らはきっと恋情のために病気になっておりましょう。**（涙を流す介をする）（生）おや、貴妃はどうして涙を流すのだ？（旦）私思いますに、牽牛と織女とは、例え一年に一度の逢瀬でも、それは永久に続いて尽きることがありません。しかし、陛下の私への御恩情は、そのよう

に長く続く事はあり得ないでしょう。（生）貴妃よ、何を言うのだ。

【黄鶯児】仙界の夫婦はなるほど長生きであろうが、地上の夫婦もさほど違うことはないのだ。二人は長い間ずっと風流を味わいつくし、時節には美景を賞で、歓楽と愛情を深めて来た。なのに、そなたはどうして逆に悲しむのだ？（旦の近くに坐を移し、低くささやく介）**天上の二星に問わん、二星の朝な夕なの愛情は、我ら二人の愛情と較べて如何であろうか。**

（旦）私は陛下の深い御恩を承っておりますが、今夜は少しお話ししたいことがございます。……（遮る介）（生）貴妃が話しがあるのなら、遠慮なく言ってくれ。（旦が生に対してすすり泣く介）私は陛下のご寵愛を受け、後宮で比べる者はおりません。ただ恐れますのは、日月が経って御恩愛も冷め、あの「白頭吟」の白髪の嘆きを免れないのではないかと。

【鶯簇一金羅】【黄鶯児】申し上げれば心も痛みます。卑しい出身の私が宮廷に侍り、天子様の御召し換えや御車のお供をしたりして、何と幸せだったことか。【簇御林】それがあっという間に、**花は衰え、春は過ぎ去り、【一封書】恩寵もよるべなくなるのを恐れます。**（生の衣服を引っ張って泣く介）**恩愛について申せば、【金鳳釵】もしそれが永久不変であれば、私は死んでも本望ですし、もしそれが一生続くのならば、私は死んでもかまいません。【早羅袍】それでも、あの漢の平陽公主のように天恩が絶たれ、陳皇后のように長門宮に孤独の日々を送って、生気も涙も尽き、腸（はらわた）も千切れ、薄命の身の上を嘆くのみであるのに比べれば、まだまだ何でもありません。**

（生が袖を挙げて旦の涙を拭く介）貴妃よ、悲しまないでおくれ。朕のそなたへの愛情がどうしてかりそめのものであるであろう。

【簇御林】心配をせずに、どうか涙を流さずに。時がたってもそなたへの愛が移ろうものか。（旦の手を取る介）**二人はクリームと蜜を混ぜたようにしっくりと固まり、片時も離れることはないのだ。**（合唱）**話しは尽きず、暗い月明りの中で花も見えず、二人の影も見分けがつかない。**

（旦）陛下のかくも深い御恩寵を承ったからには、七夕のこの二星の下でお誓いを賜り、二人の契りを固めたく存じます。（生）朕はそなたと香を焚いて誓いを立てることにしよう。（旦を携えて行く介）（合唱）

【琥珀猫児墜】肩と肩が寄り添い、手に手を取って玉階を下りる。天の河が宮殿を横切って明るく輝き、（旦）薄絹の衣服はそぞろ夜寒を覚える。（生）いざ、そなたと　声を潜めてささやきつつ、海山の深い契りを結ばん。

（生が香を捧げて揖礼をし、旦と共に福礼をする介）天上にまします牽牛・織女の二星様、この李隆基と楊玉環は、（旦が合唱）お互いに深く愛し合い、願わくは世世夫婦となって、永遠に別離することがありませんように。もしこの誓いに背くことあらば、二星これを御覧あれかし。（生がまた揖礼をする介）二人は天にあっては比翼の鳥となり、（旦が拝礼する介）地にあっては連理の枝となって仲良く生きて行きます。（合唱）悠久の天地にはいつか尽きる時があるとしても、この二人の誓いは綿々と続いて、絶えるときは無いでしょう。（旦が拝礼して生に感謝する介）陛下のご恩寵に深く感謝致します。今夜のこの誓いを私は生死をかけて守り通します。（生が旦を携える介）

【尾声】長生殿での二人の密かな誓い。（旦）今宵のこの誓いを一体誰が証明致しましょう？（生が指さす介）それは、天の河の橋のたもとにまします牽牛と織女の二星であろう。（共に退場）（小生が牽牛に扮し、雲巾と仙衣の出で立ちで、仙女を連れた貼と共に登場）見れば、下界の彼らは　堅く誓いを立て、熱心にお祈りをしている。二人の心は一つになり、二人の誓いの言葉も一つだ。（小生）天孫（織女）よ、唐天子と楊玉環は何と深く愛し合っているのだろう。そっと寄り添った二人は、肩と肩を並べて、ぴったり密着している。私とあなたとは天上で良縁を結び、地上の恋愛事を司ることになっているが、彼らはその私たちに誓いを立てているので、これはひとつ彼らを保護してやらねばならないでしょう。玄宗が　比翼の鳥を恋い、連理の枝を慕って、永遠の愛情を願っているのを見れば、彼を人間世界の恋愛を司る役目に充てるのが良いかと思います。（貼）ただ、彼らには間もなく災難が降りかかって来て、生死の別離の厄難を免れることができません。もし彼らが後々までも今日の誓いに背かないのならば、私たちが彼らの為に後縁を取り結んであげるべきです。（小生）天孫（織女）の言葉はもっともだ。ごらん、夜も更けようとしている。我々は斗牛宮へ帰ることにしましょう。（貼を携えて行く介）（合唱）天上での七夕の逢瀬は、年々いつもこの日この通り。人間世界の情縁が瞬時に終わるのを笑うばかり。

人の世の歳月の流れの何と慌しいこと、

『長生殿』訳注（六）（竹村）　　羅　鄭

今年も七夕を迎え、天の河に橋が架かり、鵲鳥が飛び回る季節となった。　李商隠
年に一度の天上の逢瀬だが、滅多に会えないと言ってはいけない。　李郢
ぴったり一つになった二人の心に、小賢しい乞巧祭など無用なのだ。　羅隠

注

（1）細楽…南宋・耐得翁『都城紀勝』に、「細楽、比之教坊大楽、則不用大鼓、杖鼓、羯鼓、頭管、琵琶、箏也。毎以簫管、笙、篥、嵇琴、方響之類合動」と。

第二十三齣　陥関

【越調引子】【杏花天】（浄が二名の蕃人の将軍を連れ、四名の兵士が軍旗を持って登場）**我が軍は狼や虎のように貪欲で威風堂々、この漁陽を鎮護する勇敢な将軍どもがごまんといる。このまま進軍して一気に函谷関を陥し入れ、勝利の凱歌を高らかに歌おうぞ。**

俺様は安禄山、漁陽の鎮護に出されて以来、辺塞の諸将と結託し、天下のお尋ね者を取り込んで百万の精兵をそろえたからには、今こそ天下取りの大事を決行すべき時だ。ただ、唐朝の天子の俺様への寵遇が深いので、その死を待って挙兵しようと思う。ところがいまいましいことに楊国忠のやつ、何度も俺に謀叛の相が顕れているといって、天子へ俺の誅伐を上奏しおった。天子は聴き入れなかったが、俺様が辺境におり、やつが朝廷にいるのでは、早く事を図らねば、その謀計にかかってしまうであろう。そこで俺は勅旨を捏造し、密旨を奉じて自分の兵士を召集し、楊国忠誅伐の為に入朝すると称した。この機に乗じて長安を破り、唐朝の山河を奪い取れば、俺様の平生の悲願は成就するのである。今日は日も良い黄道吉日、蕃将ども、いざ挙兵して進軍しようぞ。（衆）承知しました。（号令を発して進軍する介）（浄）

【越調過曲】【豹子令】ただ君側の奸臣（楊国忠）**が大禍を起こしたが為に、**（衆）**大禍を起こしたが為に、**（浄）**辺境の漁**

陽の鎮守（安禄山）が挙兵することになったのだ。（衆）挙兵することになったのだ。（合唱）いざ進軍して通過する町を尽く攻め滅ぼし、出会う人を全て斬り殺そう。屍体は野に満ちて血の河が流れ、家々を焼き払い、美女どもを強奪するのだ。（吶喊の声をあげて退場）（丑が白鬚をつけ、老将哥舒翰に扮し、二兵士を連れて登場）

【水底魚】わしはまだ年寄りでもなく、八十を越えたばかり。漁陽の安禄山軍が攻めて来れば、この老将が眼に物見せてくれよう。わしは老将の哥舒翰、潼関を守っておる。はからずも安禄山が謀叛し、眼前に殺到して来たが、わしはこの潼関を死守する覚悟じゃ。ところが、朝廷軍の役人は、わしに潼関を出て戦うように迫る。こうなってはやむを得ん、兵士ども、わしと共に全力で突撃するのだ。（兵士）了解しました。（行軍する介）（浄が大勢の兵士を率いて突進して登場）（丑が迎え打って大いに戦う介）（浄や大勢の兵士が丑を捕えて縄でくくる介）（浄）その老いぼれを連れて来い。お前の命は助けてやるから、すぐに潼関を開け渡して降参しろ。（丑）こうなったとあれば、投降せざるを得まい。（大勢の兵士が丑を護送して退場）（浄）嬉しいことに、我が軍は潼関を落として、破竹の勢い。大小の三軍ども、この勢いで長安へと突進するのだ。（大勢の兵士が応じ、吶喊して行軍する介）馬を躍らせ、戈（ほこ）を揮って、我が精へ兵は百万の多勢。兵士の軍靴が進めば、天下の山河を踏みしだく、天下の山河を踏みしだく。

白日に敵と交戦し、夜も戦いを休まない。　王　適
天を揺るがす攻め太鼓が神州（長安）に迫って来る。　韓　偓
潼関が敗れて、蕃人（安禄山）は喜び勇み、　司空図
鞭を逆さまに手に持って、酒楼に上って行く。　薛　逢

第二十四齣　驚　変

（丑が登場）「天高く聳える玉楼に笙や歌の音が起こり、風に乗って宮女の笑い声が聞こえる。月光が宮殿を照らす静かな夜には水時計の音がはっきりと聞こえ、水晶の御簾を捲き上げると、夜空に輝く天の河が間近に見え

『長生殿』訳注（六）（竹村）

る。」私めは高力士、天子様の御下命によれば、私めに御花園での小宴の準備をさせ、天子は貴妃様と共にお遊びにお出ましとのこと。これは、ここでお待ち申し上げねばなりますまい。（生と旦が輦車に乗り、老旦と貼が随従し、二人の侍従が先導して、歩いて登場）

【北中呂粉蝶児】雲が静かに浮かぶ薄青の天空に、数行の新来の雁の群れが並び飛んでいる。御園は今や秋たけなわ、柳は黄ばみ、水草の緑は褪せ、蓮の花弁が落ちる頃。美しく彫刻した欄干のあたりに、綻び始めた桂花の清らかな香りが漂い流れる。

（到着する介）（丑）天子様、貴妃様、どうぞ輦をお降り下さい。（生と旦が輦を降りる介）（丑が侍従と密かに退場）（生）貴妃よ、朕はそなたとしばらく散歩をしようぞ。（旦）陛下、どうかよろしくお願いします。（生が旦の手を取る科）（旦）

【南泣顔回】手を取って花園の中に進み、しばし気分を休める。水亭に涼風がそよぎ、風に揺らぐ蓮の花が水に映っている。梧桐の樹陰はひっそりと静かで、青葉が茂る中を二人は回廊伝いに巡り歩いて眺め見る。巣をあたためている秋の燕は人なつっこく、池に眠る鴛鴦は頭を水につけるようにして熟睡している。

（生）高力士、酒を持って参れ。朕は貴妃と飲もうほどに。（丑）水亭に宴席を準備してございます。天子様、貴妃様にはどうかお越し下さい。（旦が酒杯を取ると、生が止める介）貴妃よ、坐りなさい。

【北石榴花】そなたの　白玉のような手で盃を高く捧げるような煩わしい礼儀は無用である。　朕はただ、　そなたのような美女とさし向かいで酒を飲めればよいのだ。　朕はそなたと、互いに差しつ差されつして歌を交わし、二杯、三杯と杯を重ねて、時を過ごすことにしよう。　貴妃よ、今日の宴会はささやかではあるが、却って優雅そのもの。　**宮中の厨房で調理された龍の煮物や鳳の炙り肉の大皿も無く、宮中の厨房の大皿も無く、**　にぎやかな　**宮中の音楽にせき立てられることもない。**　ただ幾品かの　**歯ざわりのよい野菜や果物を酒菜とすれば、そなたのような絶世の美女の晩餐にふさわしいであろう。**

貴妃よ、朕がそなたと風雅に遊んで酒を飲むというのに、あれらの梨園の旧曲はどれも聴くに堪えない。思い起こせば、あの時、沈香亭で牡丹を鑑賞した時に、翰林学士の李白を召して清平調の三章を詠ませ、李亀年ら

に新曲を作らせたが、その歌詞はすばらしかった。貴妃はまだ覚えているだろうか？（旦）まだ覚えております。（生）貴妃は朕にそれを歌ってくれ。朕は玉笛を吹いて合奏しようほどに。（旦）かしこまりました。（老旦が玉笛を差し出し、生がそれを吹く科）（旦が拍板で拍子をとる科）

【南泣顔回】【換頭】満開の牡丹の艶やかさは楊貴妃の貌（かんばせ）を思わせ、雲のようにひらめく衣裳は光り輝やく。お化粧したてのその姿は誰に似るかといえば、それはあの愛くるしい趙飛燕の艶姿。類稀な名花と美女、天子はこの両方を得て、微笑み眺めておられる。春風が春の愁いを解きほぐす中、お二人は沈香亭の欄干にもたれて牡丹を鑑賞される。

（生）すばらしい。李白の詞も貴妃の歌も実に絶唱である。宮女よ、大杯を持て。朕は貴妃と差し向かいで飲むことにしよう。（老旦と貼が酒を注ぐ介）（生）

【北鬪鶴鶉】ちょうど愉快なところで **音楽と歌を止め、** 愉快なところで **音楽と歌を止め、** 微笑みながら **貴妃に酒杯を勧める。** 貴妃よ、飲み干すがよい。（飲み干して杯の底を見せる科をする）あの煩わしい **射覆や蔵鈎の物当てゲームや、** うるさいだけの **音曲などは必要もない。**（更に飲み干して杯の底を見せる科をする）貴妃よ、もう一杯飲み干すがよい。（旦）私はもう飲めません。（生）宮女よ、跪いて貴妃に酒を勧めよ。（老旦、貼）かしこまりました。（旦に跪いて勧める科）貴妃様、どうかもう一杯召し上がれ。（旦が強いて飲む科）（老旦と貼がしきりに勧める科をする）（生）朕はここで **黙って杯を手にして眺めてみると、貴妃の頬には早くも赤い花が咲いている。**（旦が酔う介をする）私めは本当に酔ってしまいました。（生）貴妃はまたたく間にぐんなりとして、**柳や花が垂れて傾いたよう、** ぐんなりとして **柳や花が垂れて傾いたようであり、** そのうとうとするさまは **嬌（あで）やかな鳶や燕が眠っているかの様である。**

貴妃は酔ったのう。宮女よ、貴妃を助けて輦に乗せ、宮殿に参るのだ。（老旦、貼）かしこまりました。（旦を助け起す科をする）（旦が酔って叫ぶ科をする）天―子―様！（老旦と貼が旦を扶えて行く）（旦が酔態をする科）

【南撲灯蛾】私はふわふわして **身体は雲のようにぐんなり、** ちらちらと **両眼に火花が飛んでいる。** なよなよした **細い腰は助け起すのも難かしく、** いやいやと **色っぽい腕を持ち上げる。** よろよろと **細い足を後ずさりさせると、** はらはらと **肩に 乱れた髪が降り掛かる。** すやすやと **枕について熟睡しようとして、** ゆるゆると

『長生殿』訳注（六）（竹村）

宮女に助けられて寝屋に入る。

（老旦と貼が旦を助けて退場）（丑が侍従と共に密かに登場）（奥で太鼓を打つ介）（生が驚く介）何処で急に太鼓を打ち出したのか？（副浄が急いで登場）「漁陽から攻め太鼓の音が地をゆるがして来り、霓裳雨衣の曲をあっと驚かす。」（丑に尋ねる介）陛下はどちらに？（丑）御花園におられます。（副浄）緊急の軍事要件につき、直接に参ろう。（進み出て見（まみ）える介）陛下、一大事です。安禄山が謀叛して挙兵し、潼関を陥しました。間もなく長安に攻めて来ます。（生が大いに驚く介）潼関を守っている兵士はどうした？（副浄）哥舒翰軍は敗れて、賊軍に投降しました。（生）

【北上小楼】おおっ、そなたは　**哥舒翰が敗れ、**挙兵した　**安禄山が**　突然に　**漁陽を離れ、東京**（洛陽）**を陥し、潼関を破ったと言うのか。**朕はびっくりして、**肝も心も恐れ戦き、**びっくりして、**肝も心も恐れ戦き、慌てふためいて魂も吹き飛び、**(注1)**花鳥風月の風流もかき消えてしまった。**

そなたに賊軍を退却させる妙策は何か有るか？（副浄）当時、臣は再三安禄山の謀叛を上奏致しましたが、陛下はお聴き入れにならず、今日果して臣の言葉通りになりました。事件は急に起ったので、どうして敵軍に対抗できましょう。ここは暫時蜀へ行幸され、天下の勤王の兵士を待つに若くはありません。（生）そなたの奏上するようにしよう。直ちに詔旨を発して、諸王百官に即刻御車に随従させて、蜀へ行幸するのだ。（副浄）かしこまりました。（急いで退場）（生）高力士、すぐに軍馬を整えよ。詔旨を発して、右龍武将軍の陳玄礼に禁軍の兵士三千を率いて御車に随行させるのだ。（丑）かしこまりました。（退場）（侍従）天子様、どうか宮殿へお帰りを。（生が舞台を回って嘆く科）ああ、歓楽の絶頂のこの時に、こんな変乱があろうとは、一体どうしたものか。

【南撲灯蛾】ぬくぬくと　**宮廷でくつろいでいるうちに、**ざわざわと　**辺境で造反する。**どんどんと　**攻め太鼓がせわしく鳴り、**もくもくと　**烽火が空高く立ち昇る。**散り散りばらばらに　**人民は離散し、**暗黒の中で　**天地は転覆している。**無残にも　**国家は蹂躙され、**無残にも　**国家は蹂躙される。**まして堪えられぬのは、**さわさわと秋風が虚しく吹き、薄暗い夕日が長安に寒々と落ちてゆく風情である。**

（奥に向って尋ねる介）宮女よ、楊貴妃はよく寝ているか？（老旦と貼が奥で応じる介）ぐっすり休んでおられます。（生）

では起さぬように。明朝五更になったら共に出発するのだ。（泣く介）天よ、朕は、不幸にもこうして都を後にすることになったが、玉や花のような彼女をも煩わせて道中を急がせねばならぬとは、何としても心痛むことよ。

【南尾声】彼女はやはり**奥深い宮殿でのたおやかな生活に慣れているので、どうして蜀道の困難に堪えられるだろう。**（大声で泣く介）貴妃よ、そなたの**玉や花のような美貌を蜀への道中に駆り立てねばならぬとは、全く愁いの極みである。**

九重の宮殿は夕日の中に沈み、　　盧綸
漁陽からの急を告げる烽火が函谷関を照らす。　　呉融
雲も聞きほれるほどの宮中の音曲は途絶えて、悲風が起り、　　胡曾
天子の蒙塵する隴山のあたりに、黄塵が立っているのが見える。　　武元衡

注

（1）原文「腸慌腹熱、魂飛魄散」…元・白樸「牆頭馬上」第三折に「魄散魂銷、腸慌腹熱」と。